

# 証空の現生論

浅井成海

(一) この小論では、西山派祖証空が、阿弥陀仏の救いを現実生活でどのようにうけとめ、その救いが、現世の生活にどのようなにあらわれると考えていたのか、この問題に焦点をしばつて論をすゝめたい。なお自筆鈔とよばれる観門義系の著述と、和語、法語類を中心資料として論究していきたい。

(二) 平生と臨終。証空は、往因の決定が、臨終をまつて始めて定まるのではなく、平生、臨終にかかわらぬと説く。弘願に帰して、仏心に相応する時、往生は定まると主張する。「命を捨てずと雖も観門弘願に帰する謂れを得れば、往生に於て決定しぬ」「念仏三昧を往生の体と心得るより外に別に臨終を置くべからず、又別の来迎を置くべからず、念仏即往生、往生即臨終なり、又来迎なり、ここを念々不捨者と積するなり」と述べている。弘願に帰する時、往生は定まるから、念仏即往生、或は信心を得る時を臨終と名付けるのである。必ずしも命終を臨終と云わない。証空の念仏は、衆生の南無を体に得た阿弥陀仏の働きによつて往生は定まるとみる

仏体即行説である。その場合、本願を領解する「領解の信心」が強調されるが、この信心定まるとき、往生定まるとみる。従つて一念より一形の念仏を論ずるについても、善知識の勧めに従う命終者が、一念往生を願う場合、なお一念に限らず、二念、十念におよび、病愈えて一形を尽す場合もある。臨終一念に特殊な意味をもたせず、一形の念をつゞめれば臨終の一念であり、臨終の一念も、平生の一念も変わらぬいと主張する。

(三) 此世の解脱。本願に相応し、平生一念に往生の大事が定まると説くが、煩惱具足の我等の身にとつて、此の世の救いは、どのような形で説かれるのであろうか。次にこの点を考察したい。「散観門義」では、即得往生を解釈している。

「観経」上品には、「若有衆生」と「復有三種衆生」を即便往生と当得往生に配する。聖道諸師は別々の衆生が、種々の行について往生すると解釈する。証空は、即得も当得も同一人について論ずべきであると主張する。即便往生とは、弘

願に乗ずれば、時節の久近を論せず即時に往生定まるをいう。弘願に乗ずる尋常の往生を指す。これに対し、当得往生は、観門より弘願に乗じ必ず生ずべきゆえに当得と述べるのである。しかし「観門義」のこの説明は、平生に對する臨終往生を指すのであろうか、その意味が明示されていない。その他「観門義」系の著述中に、この即便往生と当得往生について論ずる箇所は見あたらない。従つて平生の往生決定を即便往生とみる点は、明瞭であるが、これに對する当得往生の意味はあきらかにされていない。「三縁事」にも臨終と平生を同一とみて、名号の聞位に即便往生を説くが、当得往生についてはふれていない。しかし注目すべきは、此世と後世とに各々解脱があると指摘する点である。「定観門義」では、解脱とは、生死出離の異名、断惑の根源と定義し、さらに解脱に此世の解脱と後世の解脱の二種をあげている。此世に於いて弘願に歸し往生決定するを此世の解脱と名付ける。浄土に生れ、凡聖等しく不退の境に入り、無明を断するを後世の解脱と述べている。本願に相応し、平生に往生定まるからこれを即便往生と言ひ、現世の救いをさらに積極的に示すのである。そしてこれを「此世の解脱」と表わすのである。しかしこの現世の解脱の内容について、具体的な解釈がないからその内容は不明確である。後世の解脱とは異なり、独自の意義を考えんとするのであるから、この点をさらに異なる角度か

ら論究したい。善導、法然を承けて、証空の人間観は、深く鋭い。弘願に歸して、なお障り多く、煩惱多き人間として捉えられているが、この煩惱具足の凡夫が往生決定するという事は、「具縛の凡夫仏の願力に乗じて往生極樂を得ると信ずれば、煩惱を断ぜざれども断に等し」「凡夫決定して浄土に生ず可しと知りぬれば、自力修行の断惑証理の義に同じからず、浄土を求むる心に貪瞋を断ずる謂れあり」と述べるのである。浄土門の生死出離は、どこまでも煩惱を断せずして涅槃を得ると云われるが、いま仏願力に乗じて往生定まる時、「煩惱を断ぜざれども、断に等しく」「浄土を求むる心に貪瞋を断ずる謂れ」をみていくのである。証空のいう此世の解脱とは、本願に歸すれば、煩惱具縛の凡夫のまま、煩惱を断じたに等しい身になることだと説くのである。勿論このような身になることも仏願他力にもとずくとして、本願の働きにかえしてその源をあきらかにしている。「濁世の凡夫は煩惱具して障り尽きず、報仏の浄土に生ず可き分無しと雖も、他力を以て之を摂すれば、其の障り無きことを顯す可し」と述べるのである。

(四) 懺悔の念仏。次に注目すべきは懺悔の問題について、証空独自の本願力滅罪を説く点である。我等は、無始以来、生死流転を重ねた存在であるが、自らの懺悔によつて罪障消滅することは出来ない。弘願に歸する他力の立場にもとずけ

ば、一切の罪障は悉く除かれるのである。本願力にもとずく懺悔滅罪を説くのである。至心懺悔を解釈し、至心とは真実心、懺悔とは念仏であると説き、また弘願に帰する心とも述べている。「安心鈔」にはこれを「懺悔すとは、南無阿弥陀仏と申すなり」というのである。「観門弘願に帰して念仏の心相応しぬれば、相續して間斷無し、此の念念に罪悉く除かる故に清淨也」とも述べている。本願に帰して専心念仏するその念々に滅罪をあきらかにする。懺悔は生死流転の凡夫が、自らの罪業を深く自覚し、これを悔い改め、罪障を滅すべく精進するのである。善導は、日想觀釈で、無始よりつくる罪業を慚愧し、深い懺悔の心情をあらわすが、これをうけて証空は、懺悔というも念仏に外ならず、念々の滅罪はこの弘願念仏にあり、本願に相応し、本願に帰することこそ至心懺悔であると主張する。先にみた煩惱具足のまま、煩惱を断ずるに等しい弘願の念仏者は、また生涯をかけた念仏の実践において、仏願力によるがゆえに念々滅罪の益をうけるのである。

(五) 現世の利益。次に念仏生活における現世の利益について考察しておきたい。「五段鈔」の結びには、念仏者の現世の利益として無量劫の滅罪と阿弥陀仏見仏の二益をあげている。「西山国師御法語」には、これを五種増上縁として、簡潔に念仏の利益を述べるのである。「滅罪増上縁として罪を

けす徳あり、護念増上縁として仏に守らるる徳あり、見仏増上縁とし臨終に仏を見奉る徳あり、撰生増上縁として仏に撰取せられまいらせ候徳あり、証生増上縁として諸の悪人云何なる悪人なりとも仏の願力に乗じて必ず往生を得るなり、此の五種増上縁をいはるる方を念仏の利益とは申しはべるなり」とある。この五種増上縁について、証空は、善導の觀念法門をうけて「觀念要義觀門義」において詳しく論じている。今は証空の現世利益論をもつとも明示すると思われる滅罪、護念、見仏について考察しておきたい。滅罪増上縁を論じて、一切衆生は、無始より輪廻を重さね、罪障無量であるが、弘願の念仏には、往生後の滅罪は勿論、現生における滅罪の働きありとその徳を讃えるのである。これはすでにみた懺悔の念仏論と同じ主張であるが、五種増上縁においてさらに組織的に念仏滅罪を論ずるのである。この念仏は、称名に限らず「弘願に帰する念仏」「信心の前に罪滅すること必定なることを釈し顯す」と、称名を裏付ける信心を重視して、念仏滅罪を説く。念心に徹すれば必ず声に顯れるように、仏に帰する念仏きわまつて声に顯れる念仏であるとも説く。称名にとられず、帰命の信心は自ずから顯われ、他力念仏の滅罪を論ずる。現世の利益として念仏の滅罪を強調しながら、称名を励んで、罪障消滅のために力をつくす自力念仏に墮せぬよう留意するのである。護念増上縁については、仏心に相応す

れば、弥陀釈迦、一切諸仏に護念加護される益を説くのであるが、「延年転寿長安樂是也」の文を釈して、「内に仏心と相応し、外に聖衆の護念を得れば、身心安くして長命安樂なりと顯す」と、弥陀諸仏の護念にもとずき、身心ともに安らぎ、長命安樂の利益があると論じている。見仏増上縁については、弘願に帰すれば、本願の働きによる阿弥陀仏の見仏の利益ありと説くのである。特に注意すべきは、凡夫は本来見仏出来ないが、本願の強縁によつて見仏の謂れがあると述べる。「亦見されども、往生義疑う可からず、願力の成する所往生を本とする也」とある。仏の見、不見によつて往生が定まるのではない。願力によつて往生が定まるからたとえ見仏不可能であっても、往生義に疑いは無いのである。日本浄土教の流れにおいては、見仏の利益を肉眼で仏を見る益として、感覺的な場で、往生の証しを得えようとする主張もあつたが、これを否定し、あくまで一切衆生の往生を誓う本願の立場をあきらかにしている。これは、証空の来迎観とも関わるから、別の機会に詳述したいが、臨終来迎の見仏という問題なども、むしろ煩惱に覆われるゆえにこれのみとめず、これにとらわれない。善導をうけながら、さらに展開させて、証空独自の見仏利益を説くのである。

以上、証空教義においては、往生は、臨終に定まるのではなく、観門より弘願に帰して、本願に相応する時に決定す

る。たえず平生の救いに注目し、現実生活における本願の救いとは何かを論究している。すなわち、後世の解脱と區別して、此世の解脱を説く。煩惱を断じ得ぬ、現実の深い自己内観に立ちつゝ、なお本願念仏の実践を通して、滅罪の利益を説くなど、積極的に救いの意義をみとめていくのである。また善導の影響をうけて、さらに五種増上縁に注目し、護念、見仏など、念仏者の上にあらわれる具体的な現生の利益を論ずるのである。

- 1 定観門義（大日仏全、二五五頁）、西山国師御法語（四〇頁）。
- 2 散観門義（大日仏全、三四一頁、三六二頁）。
- 3 大日仏全（三一四頁）。
- 4 三縁事四頁（西山学報所収）。
- 5 定観門義（大日仏全二〇九頁、二五三頁）。
- 6 散観門義（大日仏全三七五頁）、礼讃観門義（大日仏全五一二頁）拙論「証空教学の考察―仏身論と衆生論を中心として―」（真宗学四〇号）。
- 7 序観門義（大日仏全一六〇頁）。
- 8 定観門義（二一七頁、二六〇頁）、安心鈔（四頁）。
- 9 序観門義（大日仏全一九四頁）。
- 10 五段鈔（一二頁）、西山国師御法語（四五頁）。
- 11 観念観門義（大日仏全二八、二九頁）。
- 12 観念観門義（大日仏全三三頁）。
- 13 観念観門義（大日仏全三七頁）。